

聖書：コリント人への手紙第一 15：50～58

説教題：いつも主のわざに

日時：2023年2月26日（朝拝）

復活に関する有名な章の最後の部分です。これまで見て来た通り、死後の命に関するキリスト教のメッセージの特徴はからだの復活ということを使うということです。永遠の命と言う時、それは魂が永遠に生きることを意味すると思われている時がありますが、死んだ人の魂が永遠に生きるという霊魂不滅説は他の宗教も述べていることです。多くの場合、魂の救いだけが強調され、からだの救いが言われないのは、からだは人間のより低い部分として低く見られているからなのでしょう。当時のコリントが置かれていたギリシャ世界もそうでした。霊的であることがもてはやされ、強調されましたが、肉体はこの世を去る時に脱ぎ捨て、やがては滅びる下等な部分と考えられていました。そんな彼らにとってからだは復活して天での生活にも伴うという話はとても受け入れられないものだったようです。そんな人々が含まれるコリント教会に対して、パウロはからだの復活があるということをこの15章で述べています。神は人間をたましいとからだの両方から成る存在として造られました。ですからその人間の救いは魂だけではなく、肉体の復活も含むというのがキリスト教の主張です。

果たしてその復活のからだはどんなからだなのかについて前回35～49節に語られました。そこでは復活のからだは今の私たちのからだからは想像もできないような素晴らしいからだであることが言われました。今の私たちのからだは朽ちて行く弱いからだですが、後に与えられるからだは朽ちないからだ、栄光あるからだ、力あるからだ、そして御霊の祝福に十二分に満たされたからだであると言われました。種を地面に蒔くと、それは土の中で解体して、やがて種とは大いに姿が異なる花を咲かせ、実を結ばせるように、私たちのからだも死というプロセスを経て素晴らしいからだを与えられると。それはすでに天の栄光に入られたキリストの栄光の姿に似るからだであると言われました。

これを受けていよいよこの章最後の部分へと入って行きます。最初の50節は先に見たことのまとめです。血肉のからだとは今の私たちのからだのことです。このからだはそのままでは神の国を相続できない。この朽ちるからだで天の御国に入るのではない。朽ちないからだ、天にふさわしいからだをいただいて私たちは天の御国を相続

する者とされます。パウロは「聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう」と言います。その奥義とは「私たちはみな眠るわけではありませんが、みな変えられます」ということです。「眠る」とは「死」を指す婉曲表現ですから、この意味は私たちはみな死ぬわけではないということです。反対から言えば死を経験しない人がいます。それは誰でしょう。それはキリストの再臨の日に地上に生きている人たちです。その人たちはどうなるかがここで問題にされています。死んだ人は葬られて、やがて新しいからだを与えられるとしても、その日に地上に生きている人はどうなるのか。そのからだのまま天国に行くのか。そうではありません。私たちは「みな変えられます」とパウロは言います。つまりその人たちも新しいからだをいただくわけです。

もう少し詳しい状況が 52 節以降に記されます。52 節：「終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちに変えられます。ラッパが鳴ると「死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。」すでに死んでいた者は復活して新しいからだを与えられ、その時、地上に生きている者たちも新しい状態に変えられます。参考になるのはテサロニケ人への手紙第一 4 章 16～17 節です。そこでも、最後の日のことが全く同じように言われています。「すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。」ここでもまずラッパの響きがあると言われます。そしてキリストの再臨が起こると、まず死んでいた者たちの復活が起こる。その後で地上に生き残っている者たちが一緒に引き上げられると。この順序は、今日私たちが読んでいる箇所のお言葉と同じです。しかしそれは一瞬の出来事であることが、52 節の「一瞬のうちに変えられる」という言葉に示されています。ラッパが鳴って、死者の復活が起こり、地上に生きていた者たちのからだが変わるのは、まばたきする間に起こる出来事であると言われています。53 節にこうまとめられます。

「この朽ちるべきものが、朽ちないものを必ず着ることになり、この死ぬべきものが、死なないものを必ず着ることになるからです。」つまり地上にその時、生きている者たちは、そのままのからだで天国に入るのではないということです。必ず朽ちないものを着、また死なないからだを着る者とされる。「この朽ちないもの」とか「この死ぬべきもの」と「この」「この」と繰り返されていますように、変えられるのは今ここで生きているこの私たちです。そこにはアイデンティティーにおける同一性、連続性があります。しかし新しい服を着るかのように、私たちは用意された新しいからだを着

て天の御国に入るので。地上にその時、生きている者たちも瞬時にそのように変えられるのです。

こうしてついに旧約聖書から預言され、予告されて来た最終的な救いが実現すると 54 節以降に語られます。そこに二つの御言葉が引用されます。まず 54 節後半はイザヤ書 25 章 8 節からの引用です。イザヤ書 25 章 6～8 節：「万軍の主は、この山の上で万民のために、脂の多い肉の宴会、良いぶどう酒の宴会、髓の多い脂身とよくこされたぶどう酒の宴会を開かれる。この山の上で、万民の上をおおうべールを、万国の上にかぶさる覆いを取り除き、永久に死を呑み込まれる。神である主は、すべての顔から涙をぬぐい取り、全地の上からご自分の民の恥辱を取り除かれる。主がそう語られたのだ。」 人々をこれまで圧倒的な力で支配し、屈服させて来た最後の敵である死が完全に打ち負かされます。もう一つ 55 節で引用されているのはホセア書 13 章 14 節です。「死よ、おまえの勝利はどこにあるのか。死よ、おまえのとげはどこにあるのか」とは、それはどこにもないという意味です。これは死に対して勝ち誇っている言葉であり、死を嘲っている言葉です。

この説明が 56～57 節にあります。56 節：「死のとげは罪であり、罪の力は律法です。」 この内、前半はそんなに難しくないと考えます。死がとげを持つのは、そこに罪があるからです。死は罪の結果、人間に臨むようになったものであると聖書は語っています。それは神のさばきです。ですからもし罪が正しく処理されるなら死のとげはなくなります。罪の解決がなされているなら、死はもはや恐るべきものではなくなる。ですからキリストを信じ、罪の赦しを得ているクリスチャンにとって、死の針はすでに抜かれており、むしろ死は祝福を与えるものでしかないと言われていました。パウロはピリピ人への手紙 1 章 21 節で「私にとって生きることはキリスト、死ぬことは益です」と言っています。彼としてはむしろ世を去ってキリストともにいる方がはるかに望ましいとさえ言っています。死はクリスチャンにとっていよいよ主の臨在へと入って行くための祝福の門、その入口のようなものであると言われていました。

後半の「罪の力は律法です」という言葉は少し難しく感じるかもしれません。これは罪は律法があることによって力を持つという意味です。律法がなければ、何が罪であり、何が罪でないかははっきりしません。律法があつて初めて、それに違反している人を罪ありと断罪できます。これについてパウロはローマ書の 5～7 章で詳しく論

じていますが、律法は言うまでもなく良いものです。しかし罪人である私たちにとって、それだけでは助けになりません。むしろ律法は私たちを罪に定め、死を要求します。さらには生まれながら神に反抗する性質を持つ私たちは律法を知ることによってかえって神に逆らう道を行こうとするとも言われます。こうして罪と死と律法はいわば同盟関係を結んで私たちを滅ぼすための力となっていました。私たちはこれらに囲まれて、さばきと滅びから逃れられない中にありました。

しかし、神に感謝します！と 57 節に語られます。「神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました」と。どのようにしてでしょうか。それはキリストが私たちの代わりに律法を満たすことによってです。キリストは私たちに代わって人として律法に全く従う 100 点満点の義を獲得し、これをご自身に連なる者たちに与えてくださいます。また罪人である私たちの罪をご自身に引き受けて、律法の要求に従い、十字架上でさばきを受けてくださいました。これによってイエス様を信じる者たちは今や律法の下にある者ではなくなりました。イエス様が律法を完全に満たしてくださったからです。ですから罪はもはや力を持てません。いやすでにクリスチャンの罪は赦され、解決されています。ですから死のとげは抜かれています。これは言い換えれば、イエス様が私たちの代わりに死のとげをご自身に引き受けてくださったということです。イエス様は十字架上で「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と叫ばれました。あそこでイエス様が受けてくださったのはまさに死のとげでした。そこでイエス様は死のとげを十分に受け切ってくださいだったので、その方により頼む私たちの死からはとげが抜かれています。イエス様は死の恐るべき力から私たちを解放してくださいました。そしてやがての私たちの復活をもって死を最終的に投げ飛ばされます。その救いにあずかって私たちは「死よ、おまえの勝利はどこにあるのか。おまえのとげはどこにあるのか。それはどこにもない！」とすることができるのです。

これらを受けてパウロは最後の 58 節で私たちの生活への適用を語ります。教理は私たちの日々の生活を変革させるものであるということです。「ですから、私の愛する兄弟たち。堅く立って、動かされることなく」と言います。パウロは 15 章 1 節をこのように言って始めました。「兄弟たち。私があなたがたに宣べ伝えた福音を、改めて知らせます。あなたがたはその福音を受け入れ、その福音によって立っているのです。」ですから堅く立つとは、この福音に堅く立つということです。この教理に堅く立つと

ということです。「動かされることなく」と言うのは、私たちは日々様々な誘惑や試練、困難に囲まれていることを意味します。ともするとその中で私たちは揺さぶられ、翻弄されそうになるかもしれません。しかしこの福音の真理に堅く立つ時に動じないでいることができるということです。確固とした歩みができるということです。

そして「いつも主のわざに励みなさい」と言います。「主のわざ」とは、主のためのわざのことです。一人一人それぞれに神の国のための召しを与えられており、そのための賜物も与えられています。それを用いて主のために、主の御国のために、主が召している働きを一生懸命するということです。「励みなさい」という部分には印がついていて、欄外に直訳は「満ちあふれなさい」と示されています。つまりそれで一杯になるようにしなさいということです。少しは奉仕しなさい、ではなく、全エネルギーを注ぐようにしなさい、益々そうありなさいということです。

その理由として最後に「あなたがたは、自分たちの労苦が主にあって無駄でないことを知っているのですから」とあります。もしこの世ですべてが終わりだとしたら、この世で労苦することは空しいことになります。一生懸命何かをしても、死がやって来て報われないかもしれません。割に合わないことになるかもしれません。そう考える時、32節で見たような「食べたり飲んだりしようではないか。どうせ、明日は死ぬのだから」という生き方になります。この世で生きている間、せいぜい楽しい生活することに集中しよう！という生き方になります。しかしこの復活信仰に立てば、労苦は主にあって無駄ではありません。ここに「労苦」という言葉が使われています。これはくたくたになるほどに疲れる働きを指します。クリスチャン生活、主に従う生活、御国のために奉仕する生活とはそういうものであると言われています。しかしそれは決して無駄にならない。それはこの地上ですべて終わりではないからです。今ここでの生き方はやがての永遠における生につながっているからです。主が私の歩みを見ておられ、主のためのわざを喜んでくださり、それを御国の完成のために用いてくださり、かの日には豊かに報いてくださる。ですから復活の日を見据えつつの今ここでの私たちの労苦は決して無駄ではないのです。それは永遠の意味と価値を持つ働きなのです。

私たちはこの福音に立っているでしょうか。この復活信仰に立っているでしょうか。以前の私たちは自分の罪のために死を刈り取る者となり、律法によって益々責め立て

られるという「罪」「死」「律法」に囲まれる望みのない者たちでした。しかし神はキリストにあって私たちに勝利を与えてくださいました！キリストは私たちの代わりの死のとげをすべてご自身において味わってください、また完全な義の生涯を歩んで私たちに義を与えてくださいました。そして私たちを救うみわざを成し遂げた方として、初穂として復活されました。そのキリストの復活は、やがての定められた日の主に連なる者たちの復活を保証するものです。57節の「神は私たちに勝利を与えてくださいました」と訳されている部分は原文では現在分詞で書かれています。ですから神は今日もキリストにある勝利の祝福に私たちを生かしてくださっています。キリストの十字架と復活に基づいてキリストにより頼む者たちの死のとげは抜かれています。そしてやがての日の復活をもって死が完全に勝利に呑み込まれる日、死が最終的にキリストの足の下に従わせられる素晴らしい救いの日、栄光の日が来ます。その日を見据えて、大いなる感謝の心から、今ここでの私たちの歩みが「主のためのわざに満ちあふれるものとなるように」と言われています。それは決して無駄になることがない歩みであり、また主に喜ばれ、主に豊かに報われる永遠の意味と価値を持つ歩みなのです。